

アダルト・チルドレンが語る「回復」への ナラティブ・アプローチ

福祉社会デザイン研究科福祉社会システム専攻修士課程修了
鈴木明由実

【要旨】 アダルト・チルドレンに関しては、主に精神医学・心理学の分野から当事者が直面する心理的・社会的困難や病理の解明、有効な治療や援助に関する知見が蓄積されている。また回復に関しては、プロセスの類型化や影響する要因の特定など、回復を客観的に判断し一般化しようとする研究が多数提出されている。しかしながら、臨床の専門家による定義や客観的状况に焦点化された従来の研究ではアダルト・チルドレンの内的世界をうまく掬い上げることができず、回復における当事者の主体的側面が浮き彫りにされているとは言い難い。

そこで本論文は、ナラティブ・アプローチにより、アダルト・チルドレンが主体的に回復しようとする具体的な実践を当事者の語りから明らかにすることを目的とした。回復における当事者固有の意味づけを丁寧に掬い上げることにより、当事者が自らの経験に即して問題を再定義したり語りを組織化することによって新たな自己や現実を構築し主体的に回復しようとする実践を提示した。

【キーワード】 アダルト・チルドレン 回復 ナラティブ・アプローチ 主観的現実

1 はじめに

本論文の目的は、ナラティブ・アプローチにより「機能不全家族で育ち成人した人々」であるアダルト・チルドレン（以下AC）が主体的に回復しようとする具体的な実践を当事者の語りから明らかにすることである。アメリカで生まれたACという言葉は1990年代に広く日本社会に浸透した。日本におけるACに関する研究は、機能不全家族で育つことが子どもに及ぼす影響に関心を向け、それがACの心理的・社会的困難や問題の世代間伝播などにつながるという認識のもと、どのような治療や援助が必要か、あるいはいかにして伝播の鎖を絶ち切るかという精神医学的・心理学的アプローチが主流となっている。

しかし本論文では、上記のアプローチとは異なる視点からACに目をむけてみたい。それ

は、当事者自身が「回復」をどのように意味づけ、その結果どのような主観的現実を獲得しているのかという視点である。換言すると、当事者によって語られる独自の回復の物語から、生き難さに直面しつつその都度、自己や現実を再構成し主体的に生きるACの姿を描きだす試みであり、治療や援助を施される存在としてACを捉える立場とは全く異なるものである。

本論文の対象者は、被虐待経験を有する2名のACであり、現在は「回復」を自認するサバイバーである。嗜癖などの行動上の問題がないACの場合、問題の中心は何らかの生き難さにある。それは極めて個別的・主観的な苦悩であり、社会生活への適応の程度といった問題の可視性の度合いとは必ずしも一致しない。それゆえ直面している危機をどのように乗り越えようとしているのか、その具体的な実践を理解するうえで重要なのは、客観的な事実よりも、当事者にとってそれがどのような意味をもち、そしてどのような結果をもたらされるかであろう。したがってACが自ら危機を乗り越え回復していく実践を知るためには、観察可能な客観的状況だけではなく、当事者が語る個別の回復と、その意味にそって新たにもたらされる主観的現実について明らかにしなければならない。そこで本論文では、AC自身による回復の語りを分析の対象とし、当事者が具体的にどのように危機から回復しているのかを検討していくことにしたい。

2 先行研究の知見と課題

ACに関する議論の多くは、精神医学や臨床心理学、看護学によるものである。それによるとACが抱える生き難さとは、機能不全家族を生き延びる際に獲得した特性に由来するといわれ、認知機能の歪みや行動の特徴、対人関係の困難、人格形成など広範囲におよぶ(Claudia Black2001=2005、西澤2003、斎藤1997、安田2003)。一方で、ACを家族の病理と捉える背景には、アディクション(嗜癖)概念の導入による「関係の病理」への発想の転換が指摘できる。「関係の病理」は絶ち切りがたく、ACであることに気づかないかぎり機能不全家族を再生産してしまうというように、問題は世代を超えて伝播する因果応報的かつ運命的なものとして捉えられており、伝播を絶ち切るには専門家による適切な介入が不可欠とされている(信田1999、佐藤2001、塚田ら2002、鶴飼2000)。これらの研究は、ACがかかえる心理的・社会的困難や、その発生機序を詳細に記述するとともに、有効な治療・援助のあり方を提示し、ACを生き難さから解放することに大きく貢献してきた。その一方で、「問題」は個人や家族に備わるものとみなされるため、ACは臨床の専門家による治療や援助の対象と位置づけられる。このことは、ACが「病理・逸脱」の文脈では「客体」と定義され、専門家の側の見方でACの生きる世界が一方向的に切り取られていることを意味しているとも言える。

また回復に関しては、プロセスの類型化、認識の変容過程や要因の特定などに着目した研究が蓄積されている(方2006、心光2002、安田ら2001、2002)。児童虐待を受けた女性サバ

イバーがその経験をどのように乗り越えていくのかを当事者の視点から検討した藤野（2010）は、サバイバーを自己修復を試みる主体性を有する存在と捉える点が本論文と共通しているが、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによってそのプロセスを概念化している点では関心が異なるものである。ACの回復は非常に困難な課題のひとつであると理解されているからこそ、どのような経過で回復に至るのか、回復に至る要因はなにかに答えようとする研究が蓄積されてきた。しかしこれらの研究の多くは、回復の一般化や普遍化を志向しており、当事者の独自の変化や経験の意味づけを十分掬い得たとは言い難い。むしろ、個別事例から一般化を目指す必然的な結果として、当事者の個別で固有の体験や意味を捨象してしまっている。

一方、ACの回復を従来の治療とは全く異なる方法で示しているのが、セルフヘルプ・グループ（以下SHG）に関する議論である。それらは、SHGの共同性や凝集性、規範やルール、SHGで得られる回復者イメージがメンバーを変容させると論じるものや（葛西1998a、1998b、石川1998、松下ら2003）、SHGで用いられている「12ステッププログラム」¹や「ハイヤー・パワー」²という独特の世界観やイデオロギーをメンバーが内面化することで回復に至ると論じるものがある（鎌原1998、松田2007、原口2004）。しかし、回復という困難な作業をSHGの対個人機能により説明することは、ACをSHGに社会化される受動的な存在として描きやすく、より能動的に生きようとするACの姿を十分に捉えているとは言い難い。

このような従来のSHG機能論に対して伊藤（2000）は、物語という観点をとると「12ステッププログラム」や「ハイヤー・パワー」それ自体が教えとしての内容をもっているのではなく、語り手の物語を方向づけたり構造化したりするレトリックと捉えなおすことが可能になると指摘している。したがって語りにおいて着目すべき点は、教示的なメッセージの質的な内容ではなく、それらが物語の中で果たす機能にある。以上より、本論文の目的は、ナラティブ・アプローチによりACが主体的に回復しようとする具体的な実践を明らかにすることである。ACの生きる世界を当事者の視点から捉えることは、癒されるべき受け身的な存在から自ら回復しようとする能動的な存在への転換、すなわちACの主体性を回復するひとつの契機となり得ることが期待できる。

3 方法

3-1 ナラティブ・アプローチ

ナラティブ・アプローチとは、現実社会的言語的に構成されるという社会構成主義の考え方を前提とし、ナラティブ（語り・物語）という形式を手がかりにしてなんらかの現実接近していく方法をさす（野口2009）。したがってACの「回復」という現実も「回復の語り」によって構成されるものであり、危機をもたらしたナラティブに代わる新たな正当性をもったナラティブへの探索過程と捉えることが可能である。また、唯一の真実の語りを探求

するのではなく、それぞれの価値観や動機によって意味構成された主観的現実の探求を目的とし、事象の客観性や整合性よりも語りの信憑性が求められることから（桜井2002）、当事者独自の回復解釈や主観的現実アプローチする本論文の目的に照らし妥当性の高い方法といえる。

また自己物語とは、「視点の二重性」、「出来事の時間的構造化」、「他者への志向」の3つの特徴を備える語りである（浅野2001）。物語論によれば、自己とは自分自身について語るという営みを通してはじめて生み出されるものであり、したがって自己は不変の実体ではなく、たえず語り直され再構成される。このような視点により、物語を語り直すことによって新たな自己や現実を構成し主体的に回復しようとするACの姿を捉えることが可能になるであろう。

3-2 倫理的配慮

対象者の選出にあたっては、複数のSHGの運営を行っているある団体の代表者に研究の趣旨を説明し、対象者候補の紹介を依頼した。その後、紹介された女性2名に個別に調査への協力を依頼した。2名とも被虐待経験を有するACであり、現在は「回復」を自認している。倫理的配慮として、匿名性・守秘性の厳守、研究協力の自由・中止の保障、論文作成の際にデータの一部を抜粋する形で用いること、学会・学術誌等で結果を公表することがある旨を口頭および文書で説明し同意書を得た。

インタビュー³はSHGが行われる場所でそれぞれ3回ずつ実施し、1回の所要時間は平均90分程度であった。1回目のインタビューでは、過去から現在までを比較的自由に語ってもらい、どのような人生を歩んできたかや、回復の過程で重要だと認識されている出来事や経験を把握するよう努めた。2回目以降は、回復の契機となる経験・出来事に関して質問し、さらに詳細な語りを引き出すよう努めた。インタビューはすべて承諾を得て録音し、逐語録を作成した。作成した逐語録は、対象者に直接手渡すかまたは郵送し、内容の確認と補足、修正や削除の有無、公表を避けてほしい箇所の確認を依頼した。なお本論文においては、匿名性保持を目的とし極一部の記述に変更を加えた。

3-3 語りの分析

本論文における「回復」とは、それを自認するACの内的世界に依拠し、当事者が認識している自己の変化、以前の自己とは異なるという非連続性の認識をさす。分析においては、回復に関する話題をもっており、なおかつ当事者の主観的レベルでの変化を描き出すものに注意をむけ、そのような語りを抽出した。そして、それらがいかなる意味で当事者にとって「回復」と認識されているのかという個人的経験の意味づけと、新たに生成した語りが導く自己や現実に着目し検討した。

また当事者は、回復の語りが聞き手に受け入れられるよう様々な工夫をこらし語りの信憑性を高めていると考えられる。語りが聞き手に納得されなければ、そもそも回復した自己や

現実を聞き手との間で共有することができず、回復の真偽にも疑問をはさまれることになる。なぜなら、語り信頼できるものだから他者が受け入れるのではなく、他者が受け入れることが語りに信頼性を与えるからである（浅野2001）。この点に関しては、当事者がどのような工夫により語りの信憑性を高めているのかという視点から検討した。

4 結果と考察

本章では、「回復」を自認している2名のACの語りから、当事者が主体的に回復しようとする具体的な実践について検討していく。焦点をあてるのは、あくまでも回復における当事者独自の解釈や主観的現実であり、回復の是非を判断したり、ACの回復とは何かを検討することではない。したがって、当事者の解釈や意味づけが含まれる語りをできるだけそのまま提示した。これ以降、本文中で逐語録から引用する場合には「 」を付す。逐語録からある程度まとめて抜粋する場合、A、Bは対象者の発話、*はインタビュアーである筆者の発話、()は筆者による内容の補足であることを示している。

4-1 Aさんの回復の語り

Aさんは、現在臨床心理士として働く20代の女性である。高校生のころ心療内科へ入院、その入院中に自殺未遂をおこす。20歳で一人暮らしを始め、その後大学に進学し心理学を専攻した。大学時代には、恋愛依存症や摂食障害を経験しSHGにつながった。

(1) 「生きていれば何となく治る」

インタビューでAさんは、「生きていれば何となく治る」のではないかと将来の見通しを語った。この一見受動的にみえる回復についての考えは、Aさんのどのような主観的現実を反映しているのだろうか。心療内科入院中の自殺未遂を人生の転機として位置づけているAさんは、そのことを次のように語っている。

A：一番最初の、(転機)だったと思うのが、入院してて、屋上から飛び降りるって行って、結局死ななかつたんですけど、その時にひとつわかりましたね、結局死ねない。その時思ったのは、死ねないんだって。死ねないんだ、と思いました。・・(中略)・・もう少しで落ちるところでしたけど。結局やっぱり、死のうと思っても死ねないんだなって思って。死ねないんだったら生きているしかなくて、生きているんだったらどうするか、どうやって生きていくか、すごく苦しいわけだから、それをじゃ、苦しくないようにしたいって思いがあるわけだから、だったらもう治療なりなんなりするしかないって思って。

この自殺未遂はAさんにとって、「結局死ねない」ということを強烈に印象づけるものであった。Aさんは「これ以上どうしようもできない」状況に直面し、「死ねないんだったら

生きているしかない」と生き方の変更を迫られたのである。「唯一大事なことは死なないこと」というように、自殺未遂を経たこの意味秩序の転換はAさんによる新たな現実の構築であり、また現在でも「基本的な」ラインと認識されている。

A：殺されるんじゃないかって感覚がずっと付きまよってましたね。線路とか電車とか、ふっと落ちるんじゃないかって。自分の意志とは関係なく落ちるんじゃないかって、だから私はそういうことしたくないんだけど、足が勝手に動いて勝手に落ちるんじゃないかみたいな、すごく漠然となんかこう、誰かに何かされるみたいな感覚はあって、ほんと、つい最近ですけど、人って放っておいても死なないんだって思ったのって。・・・(中略)・・・うまく説明できないけど、結構わたし虐待されてきたからか分からないけど、いつ何時、誰かが何かを、こう、叩かれるなり蹴られるなりして、死ぬかもしれないっていう不安があったんだと思うんです。

この語りから見てとれるのは、自分の意志の範囲を越えたところで、あるいはそれに反して死に至るかもしれないというAさんの主観的現実である。死に対する漠然とした不安がつきまよってAさんにとって、生きることはどのように感受されているのだろうか。

A：極端にいうと、自分が生きていかれるっていう、生きれるっていうことからはじまっちゃいますけど、そこからが難しい、そういう感覚を持つっていうのが難しいかなと思うときがあります。普通にだから、なんかこう、生活していくってことが自分には出来ないんじゃないかっていう漠然とした不安がずっとあるんですよね。

Aさんにとっての生は、不確かで時に揺らぎを伴うものであり、生きていけるという感覚はそれほど自明なものではない。そのようなAさんが「生きていく」ということは、不確かな生を一日ずつ積み上げることであり、意に反して訪れるかも知れない死を一日ずつやり過ごすことといえる。したがって、(Aさん自身、虐待経験との直接的な因果関係については保留しているが) 幼少期から死への「漠然とした不安」がつきまよってAさんにとって「生きていく」ことは、まさに直面する生き難さからの回復の実践そのものと解釈することができる。

ところでAさんは、自殺未遂を経た回復という語り信頼に値するものになるよう、どのような工夫をこらしているのだろうか。転機となった出来事についてAさんは、「そこで一回人生が終わって違う人生がスタートするみたいな」との解釈を語っている。このようなAさんの語りには、回心—象徴的な死と再生の過程—が組み込まれている。浅野(2001)は、この独特な回心体験を語りに組み込むことにより、語り手が過去の自分との断絶と連続を同時に手に入れることができると述べている。このような工夫によりAさんは、回復した自己

の変容と一貫性を保証することで語りの信頼性を高めていると考えられる。

(2) 「人間なので同じ悩み」

かつてAさんは、生き難さをすべて虐待経験と結びつけ、「自分だけがすごく大変」だと考えていたという。しかしSHG以外の人々との交流によってその思いはしだいに変化していった。

A：だんだん良くなってきて、他の友達と関わるようになってきたり、外の人と付き合いと、外の方は外の人で意外とすごく大変なんだと思うようになったんですけど。中と外ってあれですけど。そう思うと、普通の人もそれなりに大変なんだなって思うと、あんまり意外と変わらないのかなと思って、悩んでること自体。もしこれから何かがあるとしたら、う～ん、どうだろ、そういう意味では普通の人との悩みとあんまり変わらないのかなって感じがしますね、いわゆる結婚だったり、出産だったり、これから段階を踏んでやることってあんまり変わらないのかなって思いますね。若干は色合いは、過去によって色合いが違うから、その色合いが違うだけで、たぶん善し悪しの問題じゃないんだろうなって。

Aさんは、虐待経験がある「自分だけがすごく大変」だという固定観念を打破し、「普通の人との悩みとあんまり変わらない」との解釈に至っている。しかしながら、そのような認識に至ったとしても、Aさんの被虐待という過去がなくなるわけではない。この語りの前後で「外の人」「普通の人」との表現が多用されていることから、意識の上では被虐待者である自分と他者は決定的に二分されていることが見てとれる。そうであるにもかかわらず、「この経験上、何かすごく違うという感じにはならない」という語りからは、Aさんにとっての過去の重要性が後景に退いていることがうかがえる。自身の虐待経験が一般的ではなく、普通から逸脱しているという感情を深化させてきたAさんにとって、それが「問題」ではなく「違い」なのだというように、従来の意味世界を相対化することは大きな意味があるだろう。一人ひとり悩みが異なるのは当然のことであり、それは「善し悪しの問題」ではなく、ただ無数のグラデーションがあるだけなのだ。この語りからは、Aさんが従来の意味世界を変更することにより、虐待経験者としての逸脱的なアイデンティティが自己に与える重要性を相対的に低下させていると解釈することができる。

また、語りの時制も工夫されている。Aさんは、結婚や出産など今後体験するであろう出来事に関連づけて語りを構造化することで、未来まで続く時間的流れを生みだし、回復した自己や現実をより安定したものとして提示していると考えられる。

(3) 親しい他者への「秘密の開示」

Aさんはインタビューの少し前に、大学時代の親友に過去を打ち明けている。以下は、そのときの親友の反応とAさんの印象についての語りである。

*：友達の反応は？

A：いたって普通でした（笑）。「そうなんだー」みたいな、なんかもうちょっと、私としては感動的なものを思い描いていたんだけど（笑）、「うわー、あっさり！」みたいな、「そんなもん？」みたいな（笑）。

*：感動的な。

A：うん、（感動的な）のを望んでたんだけど、なんか向こうとしては、私はすごいなんかこう、すごい死にそうな思いで言ったのに、向こうとしてはなんか、「あ、そうなんだ」みたいな、「そういう過去なんだ、ふーん」みたいな、「別に今さら変わらないから」みたいな感じで、それはすごい嬉しかったのと、友達が反応したところは、私がそれを10年来言えなくて、でもそれをやっぱ信用して言ってもいいって思ったってところに反応していましたね。内容というよりはそっちなんだろうなっていうことがわかりましたね。

*：話してくれたってことが、友達はすごく嬉しい。

A：そうそう、そっちの方がいいんですね。だから内容はどうでもいい。内容は、「そうなんだ大変だったね」みたいな。でも別にそこから急激に関係が変わるわけでもないし、急に態度が変わるってわけでもないし、「こんなもんなんだなー」って、「面白いなー」って、「ふーん」って思っ

なかなか人を信用することができないと語るAさんにとってこの出来事は、お互いに信用しあえる関係を体感してわかる経験として意味づけられている。ここで重要なことは、過去を打ち明けたその瞬間の他者の反応だけではなく、その後も変わらずに関係性が維持されるからこそ、人を信用することが「こんなもんなんだ」との気づき生まれるのであり、「面白い」との肯定的な評価につながっているということである。このように、親しい他者への「秘密の開示」はAさんにとって、過去の虐待経験や被虐待者としてのアイデンティティを相対化させる契機となっている。しかし、当然のことながら誰にでも開示が可能なわけではなく、その相手はAさんによって慎重に選出されている。それは、上司への開示の話題から続く次のような語りからもうかがえる。

A：どっちかっていうと、今まで人の言うことが信用できなかったんですよ、だから頑張ってるねとか褒めてもらっても、それが信用できないんですよ。本当かなって思っちゃうんですよ。うん、疑ってるので。だけど、（その時）思ったのが、その上司が言うんだったら、それを信じてみようって思ったんですよ。だからその上司が、「わたしが頑張ってるよよくやってる」って言うんなら、それでいいやって思ったみたいな。そこでなんか、人間を信用するのはこういうことかなってのがあったので。きっとニュアンス的にはそういうこと。

開示を試みようと思うかどうかは、それまでの他者との関係性に大きく依存している。「その上司が言うんだったら」という語りから、Aさんはその時すでに上司にある程度の信頼を寄せていたことがわかり、そのような関係性を基盤として開示が実現したのである。そして、相手の言葉を「信じてみよう」というAさんの努力によって、「人間を信用する」ことへの感覚的理解がうまれている。Aさんにとって他者への開示が葛藤を伴う「ギリギリ」の選択であるのは、それが自らの過去との対峙であるとともに、被虐待者を異質なものとまなざす社会的な要素も影響している。Aさんが自らの過去を「すごく隠すものでもない」と感じている一方で、「誰彼構わずしゃべれるものでもない」と語るのは、そうしたまなざしから「自分で自分を守る」ためである。他者への信頼感を持ちにくいと語るAさんが、自己の存在を否定されかねない脅威や社会のまなざしを感じながらも開示を試みることは、その前提となる他者との関係構築や、開示の過程を通じての他者への信頼の獲得という困難性の高い回復へと向かう実践と解釈できる。そのため、Aさんにとってそれまでの自己や意味世界を変更する契機となる「秘密の開示」がひとつの回復として認識されているのである。

4-2 Bさんの回復の語り

Bさんは40代の女性である。大学を中退し実家を出たBさんは、その後結婚し2人の子どもを出産したが、結婚10年目に夫のDV（ドメスティック・バイオレンス）から逃れるため子どもを連れて実家のある関東へ戻った。離婚裁判と並行し、DVによるPTSD（心的外傷後ストレス障害）の治療を開始しSHGにつながった。

(1) 「12ステッププログラム」による回復

BさんはSHGで回復のための「12ステッププログラム」を知り、このプログラムで「霊的体験」と呼ばれる体験によって回復した。はじめに取り上げるのは、Bさんが回復の「第一段階」と語る、ある島での出来事についてである。

B：島に行って、本当に生まれ変わるような体験をしたんですね。それが第一段階ですごく大きかったのと、その時にはすごくもう、自然に癒されたっていうのですごく体の調子が良くなっちゃったんですよ、島に行くことで。そのあと、調子に乗って仕事しちゃったんですよ、医者への許可が出てないのに。ずーっとまたワーカホリックになっちゃって、そしてまた倒れちゃってバーンアウトで。もうダメだってなった時に、たまたま新しい12ステップの新しい本なんですけど、今までの自助グループのやり方ではステップが伝わってないってことで、書いた本があるんですね、それに会ったんです。そこに、我々は霊的に目覚めなければ回復しないみたいなことが書いてあって、これは心と体の病いプラス、霊的な病い、スピリチュアルな病い、魂が病んでいるって書いてあって。あれ？12ステップってこんなこと言うものなのかって、すごい12ステップのグループに行ってたはずなのに、初めて聞いた

言葉みたいに思ったんですね。

この語りはBさんが、生まれ変わったはずの自己の再スリップという動揺した意味世界を、「魂が病んでいたから」だと再解釈することにより修復し、危機的な事態からの脱却を試みたと解釈できる。そして、「もう一回、嘘でもいいので」プログラムを見直そうと思ったBさんは、黙想することを習慣づけるため座禅会などにも足を運んだ。

B：ある時真っ昼間に、夢だと思うんですが白昼夢みたいなかたちで、母が出てきたんですね、・(中略)・すごい若い母で、色が白くてマシュマロみたいなほっぺたしてる母で、私がね赤ん坊に戻ってるんですよ、本当に生まれたての赤ん坊なので、本当に言葉もしゃべれないただ感覚だけがあるだけで、その母がこう私を抱きあげて、なんかこう頬ずりしてくれるんですね、で、わたし赤ちゃんなので、すごいすぐったいんだけど、くすぐったいよとか言えなくて、バブバブとかなってるんですよ、すごいこう、頬ずりされて、もうやめてもうやめてもう結構みたいな、もうもう抱っこされなくても大丈夫みたいになった時に、ここ(額の中央)に穴があいたんですよ(笑)。自分のここにほんとにね、ピューンってこう、ヒューって穴があいて、金色のものが出たんですよ、ピューンって最初糸みたいな金色の糸みたいなのが飛んで、で、2個3個って飛んで、それがすごいスピードでどンドンどンドン飛んで、餡細工わかりますか？餡細工みたいに自分の体を全部包んだんですよ、・(中略)・ほんとに無重力な、そこに浮いているって感じなんですよ。で、その瞬間なんかもう、体が何百キロって、自分の家から上に、宇宙の彼方遠くに打ち上げられている、ふわーっていう宇宙空間に浮いてる感じで、すべてが満たされている、すべてを満たされたっていうか、本当に満ちているっていうか、何とも口で表現すると嘘っぽくなっちゃうんだけど、満ちているって感じがして、その満たされたっていう感覚が起こった瞬間に、ドーンって落っこったんですね。

これがBさんの「靈的体験」の語りである。これによりBさんは、「自分の魂が母を通して愛されていたし、それよりもっと大きな宇宙レベルでの愛を降り注いでもらっていた」という新たなアイデンティティを獲得し、自己と現実が劇的に変化した。自分の問題を「魂の病い」であると意味づけなおしたBさんにとって、魂が宇宙レベルで愛されていたという新たな現実はまさに回復を意味するものである。

ここで、この神秘的な語りが聞き手に受容されるための工夫について確認しておこう。下線はBさんによる語りの信憑性を高める工夫である。これは、語り手であるBさんが聞き手の視点を経由することで、否定的な評価を下されるかもしれない語りを事前に正当化しようとする戦略的な実践であり、これによって聞き手からの否定や疑問といった意味秩序を動揺

せしめる言動を回避していると考えられる。さらに、この体験はBさんによって次のように解釈されている。

B：これは私の勝手な思い込みなんだけど、神様が、あんまりにも私が母を恨んで怒りの感情でいっぱいいっぱいになってるから、あなたはこんなに愛されてたのよって、お母さんにも愛されてるし、神様がこう、宇宙のエネルギーでもいいんだけど、愛してくれてるっていうことを知らしめるために、あの体験をさせたおしか思えないんですよね。あの体験がなければ今の私はないかもっていうくらい、すごいわ満たされちゃって。

これは登場人物の視点からは分離した視点、つまり語り手の視点から行われ、この物語をどう理解すべきなのかを直接的に示している語りである。Bさんはこの体験を「神様」の意図による運命的なものという意味づけ、さらに、回復以前の自己の必然的な帰結であると解釈している。このようにBさんは、体験が生じた因果関係を説明することにより、劇的に変化した現実の断絶をうめ、回復した自己や現実を了解可能なものにしていくと考えられる。したがって、「神様」の意図という語りは、変化したBさんの主観的現実に一貫性を与え、回復した自己の正当性を保証するレトリックとして機能していると考えられる。「霊的体験」により一瞬で回復したというBさんの語りも、象徴的な死と再生の過程を経ることによって信憑性を高める工夫がされている。

(2) 「マニュアル的」な回復への懐疑

「霊的体験」以前はどのようなことが辛かったのか質問したところ、Bさんは、親との関係に「折り合いをつける」という「業界の決まりのパターン」への懐疑を次のように語った。

B：結局その、どこかで折り合いをつけなきゃいけないっていうのがこの業界の決まりのパターンで。言葉でいえば、ああ、あの人は私の子宮でした、あんな親でしたけれども産んでくれてありがとうみたいな感じで。あんな殴ったりとかする親だったけども、あれはあの人の愛の示し方だったんだ、ああいう愛の示し方しかうちの親は出来なかったんだって。よく考えてみれば産んでくれたことも感謝だし、躰と称して殴りながらも学校とかにもやってくれたわけだし、ま、結局は感謝ですよみたいな感じで、なんかこうマニュアル的に、割とこの折り合いをつけていく人結構いっぱいいるんですよね。で私もそういう人いっぱい見てるし、でもなんかね、それだけではね、どうしてもね、身体症状が残るんですよね、だるい感じが。折り合いをつけるっていうよりも、結局あきらめるっていうことなんです。

*：親をあきらめる？

B：うん親をあきらめるし、もうこの親からは貰うものはないって、あきらめるみたいな感じだから。なんかあきらめるのって、結構ね、大人、それが普通の大人になるってことなの

かもしれないけど、やっぱりちょっと、うーん、腑に落ちない？・・(中略)・・だから私もやっぱり発作みたいに、一年に一回くらい親を殴りに行こうかって思っていましたね。うーん。本当に発作みたいに来るんですよ、それが・・(中略)・・そしたらスカッとするかなとか、それをやらないと自分も成長しないのかなって思ってたし。

これらの語りからは、回復以前のBさんにとって、親との関係に「折り合いをつける」ということが「普通の大人」になることであり、「自分が成長」するために必要なことであるというように、自己や現実の理解にまとまりを与えていたことがわかる。しかし回復した現在は、親に対する怒りの感情や身体症状が一切なくなったのであり、そのように現実が変化したBさんは、「身体症状が残る」以前の「マニュアル的な」方法では回復をうまく説明することができず、それに懐疑的にならざるを得ないのである。このことは、Bさんにとって以前は有効に機能していた回復の解釈が別のものへと書き換えられる必要性を示唆している。Bさんは、新たな主観的現実に合わせて回復の条件をどのように書き換えたのだろうか。

B：順番の問題なんですけど、先に社会的回復を第一義に挙げていると、結局回復しないケース結構多くって。まず魂の解放っていうか、本当に心の底からもう、自分の存在そのものが解放されて自由な存在だっていうことを本当に実感してからじゃないと、社会に出ていけないっていうタイプの人もあるなって最近見てるんですよ。だから、例えばアルコール（依存症）の人とかはアルコールが止まって、飲まなくてもいいってことがわかって、AAにさえ行っていれば断酒できてるっていう、そういうの私たちは根性断酒って呼んでるんだけど(笑)・・(中略)・・そのあとの問題ってあるんですよ。すごく怒りの感情が出てきたりとか、いらいらしたりとか。

この語りからはBさんが、「魂の解放」を回復の第一義と考えていることがわかる。そうでなければ本当の回復には至らず、たとえ状況が好転したとしても一時的なものであり、違った形で問題がぶり返すのである。Bさんによる回復の解釈は、親との関係に「折り合いをつける」ことから「魂の解放」へと書き換えられている。このような再定義は、Bさんの回復を正当化し、新たな自己や現実の自明性を保証するものであると考えられる。つまりBさんは、自らの経験と主観的現実の変化に即して回復を再解釈することにより、動揺した意味世界を秩序づけ、自己や現実の一貫性を保とうとしていると考えられる。

(3) 回復した自己の提示

Bさんはインタビューのなかで、過去の自分がいかにひどかったかという語りを繰り返した。たとえばSHGの仲間に対して批判的な見方をしていた過去について、次のように語っている。

B：今思うと、私は、ミーティングに来て親を恨んでるとか、あの親のせいでとか言ってる人達の話聞いて、情けない人たちだと思ってたのに、私はもっとひどくて、そういうことも言えなかった、そんなこと言うこともバカバカしいくらいに思ってたから、本当にその人たちよりも重症だったと思いますよね。

Bさんは過去の自分を、「傲慢」で「プライドが高かった」と振り返っている。そうすることで生き延びてきた部分もあると肯定的に意味づけながらも、「自分ひとりで何暴走してたのかなって思いますよね」と突き放すように語った。過去のひどかった自分についての語りは、そこからの回復がいかに劇的なものであるかを聞き手に印象づける。このような語りは、回復した現在の自己がより卓越したものであることを際立たせ、新たな意味世界に生きる自己を提示していると考えられる。また、インタビューの別の場面では、現在ACであることを否定することで過去との差異を強調している。

*：ACってどういった、Bさんが考えるACというのは。

B：今だから言うけど、今は本当に自己憐憫酔っ払いな人たちだと思いますよね。・・(中略)・・ACだけど全然関係ないよって人も、もちろんそういう人もいるけど、・・(中略)・・自分は悪くなくて親が悪い、親のせいで自分はこんなになってしまったっていう、一種の、やっぱり自己憐憫酔っ払いかな(笑)。

*：(Bさんにも)そういう時期が昔あった。

B：私それに気がつきもしてなかったんですよ。何かそれは、やっぱり質が悪かったなって思うのは、親なんか恨む価値もないかと思ってたんですね。

Bさんは、ACを「自己憐憫に酔っ払っている人」と定義し、かつては自分も「激しく自己憐憫に酔っ払っていた」と語った。そして、現在ACであることを否定することによって、憐憫の情とは無縁の回復した自己を提示していると考えられる。さらに、BさんがACであることを否定するのは、その社会的認知のされ方とも関係している。

B：一番、その理解されない部分、社会的にも甘ったれてるんじゃないかって言われちゃう人たちですよ、要は。社会適応出来なくて、親が何だって話になってきちゃうと。やっぱりACっていう言葉にはすごい賛否両論あって、公とかではやっぱり、ACなんて日本国民全員ACなんだからって。だから、あんたたちはただ甘ったれている人たちって言われちゃう。あの、福祉とかでもそういう風に思う人もいるし、福祉の職員とかでね。だから、やっぱり、どうして働けないのとか、ただ甘ったれてるだけって見てる人もいる、見られちゃう、まだまだそういう意識があるとは思うんですよ。

Bさんの自己提示は、このような社会的文脈の上で行われている。インタビュー当時、常勤の職にはついていなかったBさんがACというアイデンティティを否定するのは、ACに対する社会の否定的なまなざしから自己をまもり、主観的現実の動揺を回避するためと解釈できる。つまり、ACを取り巻く社会的背景を基盤とした意図的なアイデンティティの変更であり、社会の側からの自己に対する評価を無効にしようとする戦略な自己提示の実践だと考えられる。

5 おわりに

本論文では、ナラティブ・アプローチによりACが主体的に回復しようとする具体的な実践について検討し、以下のことが明らかになった。ACは、自らの経験をもとに問題や状況を再考し、新たな解釈を採用することで動揺した意味世界を修復し危機的な状況から脱していた。また、他者との相互作用を契機に従来の意味世界を変更することにより、自己や現実を能動的に再構築していた。そして、回復した現在に合わせて過去の出来事を関連づけ語りを組織化することにより、自らの回復を正当化し、新たな自己や現実の自明性を保証しようとしていた。さらに、自らの回復が聞き手に信頼されるよう、象徴的な語彙やレトリックの型を語りに組み込むことで、回復により変容した自己の一貫性を保ち、語りの信憑性を高めようと工夫していた。

本論文では、従来の研究では欠落しがちであったACの内的世界へ定位することにより、当事者が自己や現実を新たに構築する営みを捉え、主体的に回復しようとする実践を浮き彫りにすることができたであろう。ただし今回の対象者は、自らの経験を意味のある方法で整理し、それを個人的な語りとして他者へ伝達するという高い能力を備えるものであった。また明らかになったのは、あくまでもACの生きる現実の一端にすぎず、ACの主体的回復が「ドミナント・ストーリー」として権力をもつと、そのほかの回復のあり様や、回復の語りによらない生き方を否定することにもなりかねない。そのため、今後も当事者の個別・具体的な回復の語りから、多様な回復の契機やあり方を明らかにしていくことが求められる。また、ACが語りによって新たな自己や現実をいかに構成するのかという問題に焦点化した結果、語りが生みだされる社会的諸条件には考察が及ばず、これについては今後の課題とした。

【注】

¹ 「12ステッププログラム」は、もともとアルコール依存症者のSHGであるAA (Alcoholics Anonymous) で使用されていたものである。現在はほかのSHGでもそれぞれに改編し用いられている。

² 「ハイヤー・パワー」は「12ステッププログラム」に登場する概念であるが、「自分を越えた偉大

な力」を意味し、回復において重要な意義をもつ概念である。しかし、特定の何かを指す概念ではなく、何を「自分を越えた偉大に力」とみなすかは、(それを信じるか信じないかも含めて) 個々人の解釈に任されている。したがって、「ハイヤー・パワー」は個々人によって異なる表現が用いられ、「神様」と呼ばれることもあるが、特定の宗教とは関係のないものであり、「自分で理解する神」を指す。

³ インタビューは2009年8月から10月に実施した。

【引用文献】

- 浅野智彦、2001、『自己への物語論的接近－家族療法から社会学へ』勁草書房
- 方仁成、2006、「断酒会におけるアルコール依存症者の回復過程」『心理臨床学研究』24（4）：464-475
- Claudia Black, 2001, *IT WILL NEVER HAPPEN TO ME 2nd edition*, Claudia, Inc. (斎藤学監訳、2005、『私は親のようにならない』誠信書房)
- 藤野京子、2010、「児童虐待を受けた女性サバイバーが30歳代に至るまでのプロセス」『犯罪心理学研究』47（2）：33-46
- 原口芳博、2004、「アルコール依存症の回復過程に関する臨床心理学的考察：成長統合モデルという自己調整法を中心に」『福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学』1：43-50
- 石川由香里、1999、「アルコール依存からの回復と道徳性：アルコホリックの夫とその妻の関わり」『活水論文集』（活水女子大学）42：1-15
- 伊藤智樹、2000、「セルフヘルプ・グループと個人の物語」『社会学評論』51（1）：88-103
- 鎌原利成、1998、「霊的成長における超越性と共同性の問題：アルコール依存症からの回復とAA」『京都社会学年報』（6）：61-79
- 葛西賢太、1998a、「Alcoholics Anonymousにおける自己のゆるやかな凝集：多中心的自己と霊性」『上越教育大学研究紀要』17（2）：831-843
- 葛西賢太、1998b、「『精神世界』を支持する〈ゆるやかな共同性〉」『宗教と社会』4：129-152
- 西澤哲、2003、『トラウマの臨床心理学』金剛出版
- 信田さよ子、1999、「アダルト・チルドレンと共依存」斎藤学編『依存と虐待』日本評論社、17-30
- 野口裕二編、2009、『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- 松田博幸、2007、「セルフヘルプ・グループの参加者による実践における『完璧であることの不可能性』：AAの参加者からのインタビューより」『社会問題研究』56：41-62
- 松下年子、田辺ますみ、山崎茂樹、2003、「アルコール依存症者の回復者イメージ：アルコールクリニックにおける患者面接より」『アディクションと家族』19（4）：545-553
- 斎藤学、1997、「親と子という危険な関係：ACという概念をめぐって」『現代のエスプリ』

(358) : 56-65

桜井厚、2002、『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房

佐藤恒雄、2001、「アルコール依存症の家族とアダルト・チルドレンの関係について」『道都大学社会福祉学部紀要』(27) : 13-23

心光世津子、2002、「断酒に至る認識変容過程：断酒会会員を例として」『看護研究』35(3) : 45-54

塚田園美、金谷光子、2002、「機能不全家族の病理性：アダルト・チルドレンの幼児期に焦点を当てて」『飯田女子短期大学看護学科年報』(5) : 135-151

鵜飼奈津子、2000、「児童虐待の世代間伝達に関する一考察：過去の研究と今後の展望」『臨床心理学研究』18(4) : 402-411

安田美弥子、2003、「アディクションの家族支援」『現代のエスプリ』(434) : 119-126

安田美弥子、松下年子、2001、「依存症の回復におけるセルフヘルプグループの機能の研究(2)：回復群と治療群の比較」『東京保健科学学会誌』4(2) : 83-88

安田美弥子、松下年子、2002、「依存症の回復におけるセルフヘルプグループの機能の研究(4)：アルコール依存症からの回復の諸相およびセルフヘルプグループの意義」『東京保健科学学会誌』5(2) : 61-74

A Narrative Approach to the “Recovery” of Adult Children

SUZUKI, Ayumi

Regarding Adult Children, the perception or knowledge has been accumulated for clarification of psychological/social adversity against those individuals, effective treatment, and assistance mainly from the field of psychiatric medicine and psychology. Furthermore, regarding the recovery, many studies also have been submitted as attempting to judge and generalize the recovery objectively for pinpointing the process pattern and the influential factor. However, in the existing studies focusing on definitions and objective circumstances by clinical specialists, those studies fail to absorb the inner world of Adult Children and it is hard to cite that the independent-mind aspect for those individuals is revealed for recovery.

Therefore, with a narrative approach, this dissertation aims at clarifying a specific practice from their stories as Adult Children attempt to recover proactively. By carefully absorbing an intrinsic meaning for recovery from those individuals, it presented a practice to achieve the recovery proactively in accordance with constructing a new self-identification and reality by redefining a problem and organizing their stories along with their own experience.

Keywords : Adult Children, recovery, narrative approach, subjectivity